

# DICTIONARY OF OLD ENGLISH

## 編纂について

水 鳥 喜 喬

カナダの Toronto 大学中世研究センター (Centre for Medieval Studies) では、1970年以来、*Dictionary of Old English* (以下 DOE と略す) の編纂作業がコンピューターを駆使して進められているが、筆者は1975年1月10日からの6週間を同編纂室で過ごす機会を持ったので、それ以降同編纂室から手元に届けられてきている公的・私的情報も参考にしつつ、この古英語の包括的な辞書の編纂作業の進捗状況などについて関知するところを記したい。

### I 編集スタッフと資金

#### 1 編集スタッフ

1975年末現在、DOE 関係の主要スタッフは次のとおりである。

Editors:

C. J. E. Ball, Lincoln College, Oxford

A. F. Cameron, Centre for Medieval Studies

University of Toronto

Editor: Toronto Old English Series; M. R. Godden, Exeter College, Oxford

Computer Consultants:

R. L. Venezky, University of Wisconsin, Madison

Paul Bratley, Serge Lusignan, Université de Montréal

International Advisory Committee:

Professor Helmut Gneuss, University of Munich

Professor John Leyerle, Centre for Medieval Studies

University of Toronto

Professor Fred C. Robinson, Yale University



*Dictionary of Old English* Committee (University of Toronto)

Professor A. F. Cameron

Roberta Frank

John Leyerle

H. A. Roe

L. A. Shook

現在のところ、*DOE* 編纂の実質的な作業は、Cameron 教授の指揮のもとで、専属の助手およびタイピスト各1名のほか、大学院学生など約10名によって毎日行われている。

## 2 資金

*DOE* 編纂という project を支えているのは次の資金および機関である。

(1) The Canada Council Grant

(2) Foundation for Education and Social Development, Boston

(3) The University of Toronto

上記のうち、この project の中心的な財源となっているのは(1)の Canada Council からの助成金である。毎年 \$20,000 から \$30,000 が支給されており、1974年度の支給額は \$27,000 であった。これまで Cameron 教授は毎年この project の進捗状況を報告し、翌年度の応募申請をする必要があったが、1975年に Canada Council は *DOE* の編纂に対して1976年以降5年間の助成金の支給を決定した。これはこの project が実質的に完了すると見做されている期間の資金面の保証であると考えられる。

(2)の Foundation for Education and Social Development からの支給は Canada Council からのものに比べるとごく少額で、主に、編集者や協力者の旅費などに当てられている。

(3)の大学当局からの援助とは、文献の購入などの金銭的なものもあるが、むしろ勤務条件や施設面に関するもので、Cameron 教授の担当講義数の軽減や研究設備の提供といった形のものである。*DOE* の編纂室は1974年夏までは中世研究センターの一室であったが、それ以後現在は大学構内に新築された Robarts Library の14階（最上階）の 14281, 14283, 14285 および 14290 号室の四部屋になっている。

なお、1975年度には、これらに加えて、Macdonald-Stewart Foundation の補助も受けているが、詳細は不明である。



## Ⅱ 編纂作業過程と進捗状況・今後の見通し

DOE 編纂刊行の目的、編纂方法などに関しては、Angus Cameron, Roberta Frank, and John Leyerle (eds), *Computers & Old English Concordances* (University of Toronto Press, 1970) および Roberta Frank and Angus Cameron (eds), *A Plan for the Dictionary of Old English* (University of Toronto Press, 1973) その他により知られるところであるが、その後入手した資料や情報も利用して以下に紹介する。(なお、DOE 編纂に対する Cameron 教授の個人的動機についてはⅢ 1 を参照されたい。)

この project は DOE の編纂をあくまでも目的としたものであるが、編纂の副産物として、一つには OE のすべての文献の刊本化、もう一つには OE のすべての文献にわたる concordance の作成という、主目的に劣らぬ価値の高い成果をとまなうものである。

### 1 編纂作業過程

(1) Collecting of (i) OE MSS in microfilm.

(ii) printed editions of OE texts.

OE で書かれたテキストは、上の両方の形で可能な限り蒐集される。

(2) Making facsimile editions of OE MSS from (1)(i).

Microfilm にして蒐集された OE の MSS から facsimile editions を作る段階である。

(3) Pre-editing, i. e. preparation of texts for typing.

(1)(ii) の OE の printed editions を使用して、MSS と照合しつつ、DOE に利用できるテキストを編む作業である。

(4) Typing texts in computer-readable form from (3).

(3)の作業で作成された OE のテキストが、次の(5)の段階のために、computer-readable sheets にタイプされる段階である。

(5) Scanning and putting texts on tapes.

(4)でタイプされたテキストは再度チェックされた上で Computer Resources Ltd. に送られ、ここで computer 処理用のテープに収められる。

(6) Computer processing in Madison.

(5)で作られたテープは Madison にある Wisconsin 大学の Venezky 教授のもとに送られ、ここで computer を使用して処理される。text print-outs



が DOE に送り返えされる。

(7) Proof-reading of text print-outs.

Madison から届けられる computer text print-outs の校正・照合作業はテキストの確定にとって重要である。

(8) Printing-out of Concordances.

OE のすべてのテキスト個々の concordance が編まれる。

(9) Compiling DOE, making use of concordances (8).

見出し語の整理配列、語形や語義の記載、引用文の例示等々辞書編纂の作業を computer を最大限に利用して行う。

## 2 現在の進捗状況と今後の見通し

OE のほとんどすべての MSS が microfilm に収められて、14281 室のキャビネットに保管されている。きわめてまれではあるが、地方の cathedral などで、photographic service をしないところがあったそうである。今日までに公刊された OE のテキストも現物またはゼロックスコピーで同室に置かれている。

Microfilm にして蒐集されている MSS はすでにすべて facsimile edition の形にして製本され、分類されて、同じ部屋の本棚に配列されている。未編集の MSS については、筆者の滞在中は転写の作業が毎日続けられていたが、現在ではこの作業も終了しているようである。これはテキストの校合のための重要な作業である。

これ以後の段階に属する作業は平行的に進められている。筆者の1975年2月19日と20日の記録を調べてみると、19日には、当時助手であった John Chamberlin 博士が(3)の段階で *Phoenix* (*Plan for DOE* の 'text-list' で A. 3. 4) を終了、これをタイピストに渡し、Cameron 教授は *Anglo-Saxon Minor Poems* の text print-outs の校正をしていた。翌20日には Chamberlin 博士は *Juliana* (同 A. 3. 5) および *Wanderer* (同 A. 3. 6) について前日と同じ作業を行い、Cameron 教授は届いたばかりの Concordance to B. 1. 3. 1. (記号については上と同じ) の microfiche を microfiche reader でチェック、午後には Montréal 大学から来訪した Bratley 教授 Lusignan 博士と DOE の語彙項目配列について computer 技術の導入を協議した。

Concordance については、当初は、Iowa 州の Waterloo 大学の協力で、



いわゆる KWAC (key word out of context) 方式をとり、散文の場合は key word の前後それぞれ10~11語を含めて引用、韻文の場合は key word の含まれる一行を引用する(従って、最終的に配列されると、key word だけは縦一本のコラムをなす)形式をとったものが、すでに OE のいくつかの作品について computer sheet ででき上がり、DOE の編集室に保管されていた。しかし、その後、辞書編纂の目的により有効な KWIC (key word in context) 方式が採用され、引用は散文・韻文ともに key word を含む one sentence という形式のものが、Madison の Wisconsin 大学の協力で作成されつつある。筆者は滞在中に、*Anglo-Saxon Poetic Records* と J. C. Pope (ed.), *Homilies of Aelfric* それぞれの concordance が computer sheet の形ですでに完成し、前者は21分冊に、後者は7分冊に分けられているのを手にとって見ることができた。W. W. Skeat (ed.), *Aelfric's Lives of the Saints* の concordance もすでに幾分冊かが届いていて、これらはいずれも 14281 室に保管されていた。最も新しい情報では、Wisconsin 大学の Venezky 教授、さらに Yale 大学の Robinson 教授も加って、これらの computer concordance を microfiche の形で刊行する計画が目下検討されているそうである。これが DOE の project とは別個の project として取り組まれることになれば、*Concordances* の方は DOE よりもずっと早く公にされることになる。上述のように、これらの concordance はいずれも通常の書籍の形では非常に大きなものになることは明らかである。なお、筆者もこれらの concordance の幾枚かの microfiche が届いているのを見た。

さて、OE のテキストの方であるが、(4)の過程に関しては、筆者が滞在中は DOE 専属のタイピストが 14285 室に設置された IBM のタイプライターを使用して連日タイプしていたが、現在ではその作業はほとんど完了したようである。二つ以上の写しが存在している同じ MSS を照合して語彙の相違を調べる作業は、韻文についてはすでに終わり、散文に関しても本年の中か来年ぐらいには完了の見込みである。また、computer text print-outs の校正作業は、昨年末までに詩、Aelfric の諸作品および Alfred 関係の翻訳作品のすべてについて完了しており、これは OE テキストの全体の 1/3 以上に相当する分量である。

従って、DOE の編纂作業はいよいよ最終段階の具体的な実施計画を考案するところまで到達している。前にも記したように、筆者が滞在中の



1975年2月20日に Montréal 大学から Bratley 教授と Lusignan 博士が DOE 編纂室に来訪し、Cameron 教授と協議を開始したが、computer を使用して photo-composition により DOE を編集する試案がその後できたということである。これに応じて、DOE 編纂室では昨年夏、Dに始まる語の見出し語を設ける作業に着手。concordance 資料の導入について調べ、来年春の OE 研究家の会合の際これを提示する予定で、その成果が期待されるところである。

同時に進展中の OE テクストの編集作業の方は、昨1975年に Oxford の Exeter College の M. R. Godden 氏が編者に決定し、Toronto Old English Series の総称のもとで、かなりのテクストがすでに編集スタッフの元に集まっている様子である。このシリーズの最初のものとして Raymond Grant's edition of Three Homilies from Ms. Corpus Christi Cambridge 41 が本年中に刊行を予定されている。

いよいよ各見出し語項目に関する原稿作成の時期が近づいており、ごく最近手元に届いた通信では、目下、各国において発表された OE の語彙に関する研究書・研究論文のリストを作成し、現物の蒐集にとりかかっているとのことで、わが国で発表された関係文献の入手方を依頼してきたので、筆者の知る限りの資料を早速発送している。しかしながらその大部分は邦語で書かれているので、DOE 編纂室がわが国の研究者の成果をどの程度理解し利用できるのか懸念されるところである。

### Ⅲ その他

#### 1 Angus F. Cameron 教授

Cameron 教授は1941年 Nova Scotia の生れ。Oxford 大学 Jesus College の出身。tutor は John Burrow 氏。Supervisor は故 Alistair Campbell 教授。1968年に“The Old English Nouns of Colour, a Semantic Study”で B. Litt. を取得。同年 Toronto 大学に赴任し現在にいたる。Jesus College 在籍中から例の Bosworth-Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* に不満を持ち、特に reference の行き届いた OE の包括的な辞書の必要を痛感していた。この頃から Lincoln College の Christopher J. E. Ball 氏との親交が始まったが、Ball 氏が Clarendon Press からの OE の新しい辞書作成の話を多忙のために断ったいきさつなどがあり、これらの事情が Cameron 教授が DOE の編纂に着手する動機となったようである。



同教授は Oxford 在学中から computer とその利用に強い関心があったそうで、その方面の講義を熱心に聴講していたらしい。同教授はこのような新しい技術の導入にきわめて意欲的で、DOE の編纂に computer を積極的に利用していることは前にも触れたとおりである。DOE の編者は 11 で示したとおり Ball 氏と Cameron 教授の二人になっているが、編纂の実質的な作業は Toronto 大学側で進められているので、Cameron 教授は編纂の仕事だけでなく、関係各方面との連絡、出張、来訪者の接待、資金の調達、人事管理等々この project の運営・管理全般にわたる任務のため、精神的にも肉体的にもきわめて多忙である。1970年に着手したこの project の完了を同教授は当初15年先と見込んでいたが、computer による編纂という大きな省力化のめどがついてきたため、現在では1980年完成を目標にしているようである。とにかく同教授は新開発の技術の導入には非常に積極的・意欲的である。

## 2 故 Alistair Campbell 教授の蔵書

1974年2月 Oxford 大学の Alistair Campbell 教授が現職のまま急逝されたが、同教授は DOE の International Advisory Committee の一員であった。同年 Toronto 大学の中世研究センターは同教授の語学関係の蔵書を購入することを決定し、1975年7月に現物が到着した。蔵書のうち書籍類は大学構内の Pontifical Institute に、論文類は DOE の研究室に保管されることになった。これらは当然 DOE の今後の作業において利用されることになる。

## 3 おわりに

筆者は1975年1月10日から6週間、Toronto 大学構内の宿舎である Hart House および Windle House に宿泊し、ここから同構内の Robarts Library 14階の DOE 編集室に通ったが、その期間に下記の三つの homilies の手書本を転写した。(これらは編纂室専属のタイピストによってタイプされ、同編纂室に保管されている。)

Oxford, Bodleian, Bodley 340 ff. 123–128 “Palm Sunday.”

Oxford, Bodleian, Bodley 340 ff. 144–152v “In Sabbato Sancto.”

Oxford, Bodleian, Junius 121 ff. 63–64 “Leofa man *pe* is mycel  
pearf *pæt* ðu *pas* drihtenlican tide georne gepence.”



最後に、Toronto 大学滞在中 Cameron 教授をはじめ DOE 編纂室の人々、さらに中世研究センターのかたがたからうけたすべての暖い好意に対して、心からのお礼を申したい。  
(1976年7月31日)

# 追記

ごく最近入手した報告書に記されている下記の表が、1976年末までの進捗状況を知るのに便利であると思われるので、ここに付記する。

	In computer readable form	Proofread	Corrections entered	1st stage concordances run	2nd stage concordances run
Poetry	A11	A11	A11	A11	
Prose	A11	B1 - B14 B17 - B21	AElfric Wulfstan Anonymous homilies Boethius Soliloquies	B1 - B2	
Interlinear Glosses	A11	4 psalters Rushworth Gospels Glossed Hymns			
Glossaries	A11				
Inscriptions	A11				

なお、Oxford の Christopher Ball 氏は、公務多忙のため、1976年11月をもって編者を辞したとのことである。  
(1977年1月31日)